巻頭特集

伊勢桑名の刀工 村正
秀でた作風と妖刀伝説

小説や映画などにたびたび登場する妖刀村正。桑名の刀工、村正が鍛えた刀剣を指し、恐ろしいほど切れたと伝わる。妖刀として知名度が高い反面、数代続いたとされる村正の出自などは定かでなく、地元桑名で作刀していた事実を知る人も少ない。現在、村正の特別企画展を開催する桑名市博物館を訪ね、学芸員の杉本竜さんに話を聞いた。

九月十日から開催している特別企画展「村正」

右）今年二月、三重県指定文化財となった太刀。銘に「勢州桑名郡益田庄藤原朝臣村正作」とあり、刀身には漆が塗られている。桑名宗社蔵　中）神館神社蔵の太刀。茎（なかご）に「勢州桑名藤原朝臣村正作」の銘が、佩表（はきおもて）には「神立」の彫が、それぞれ見られる　左）たなご腹の茎（なかご）に「村正」の銘が切られている。桑名宗社蔵の短刀

桑名の地で、切れ味鋭く実用性に優れた刀を制作

村正の銘は数代あるとされ、三代まで続いたという説が有力である。江戸時代に入り、徳川家に祟るとして忌避されるようになって、四代目以降、千子と改称した。千子派の刀工には正重、正真などが名を連ねる。

初代は美濃赤坂（現大垣市）の出身と伝わり、美濃伝（五家伝の一つ、美濃様式の作刀）を学んで桑名へ移り住んだといわれている。「移住の理由は不明ですが、美濃赤坂の出身が正しければ、どちらも交通の要衝で水運が盛んという環境が共通します。自身の故郷に似ているうえ、揖斐川を下るだけで来られる点もあり、作刀する場所の選択肢に入りやすかったのでは」と桑名市博物館の学芸員、杉本竜さんは想像する。

村正の特徴といえば「たなご腹」。刀身の柄に被われる茎の形状が、タナゴという魚の腹のように幅が盛り上がって急に狭くなっている。また、村正の美意識なのか、焼き入れの効果によって生まれる刃文を裏表でそろえた。「ふくら枯れる」と刀剣の用語で表現される、切先の鋭さも特徴だ。刀の先、尖っている部分のカーブをふくらといい、このカーブが直線的で鋭い。

戦国の世では多くの刀が必要とされた。切れれば良いと、数打物と呼ばれる既製品、消耗品が大量に出回ったなか、村正の刀剣類は比較的安価な数打物でありながらも切れ味が良く、実用性に秀でており、名工であったことがうかがえる。

上）走井山（桑名市馬道）にあったと伝わる村正屋敷跡に立つ案内看板　左）錆（さび）を防止するため、刀身に丁子油（ちょうじあぶら）を塗る。「刀の手入れをするときは、心静かに細心の注意を払うことが大切」と杉本さん

徳川家に仇なす刀として妖刀のイメージが定着

妖刀伝説の由来を紐解いていくと、確かに徳川家にとって不吉といえるかもしれない。家康の祖父、松平清康は村正で刺殺された。父の広忠も村正で負傷。家康自身も村正の槍を手にして指を傷つけた。さらに嫡子、信康が織田信長の命で切腹となったとき、介錯した刀も村正であった。

徳川家に敵対した真田信繁（幸村）、由井正雪などが村正を用いていたともされる。こうした伝説に加えて、江戸中期以降、芝居や講談で身を滅ぼす刀、血を好む刀としても取り上げられ、妖刀村正の名が広く流布されていった。幕末には、徳川を倒す刀として尊皇派がこぞって欲しがったともいう。西郷隆盛は実際に村正を所持しており、有栖川宮熾仁親王も江戸城接収の折、村正を身に帯びていた。

「家康の周囲で村正にかかわる事件がこれほど重なると、とは思いますが、当時多くの三河武士が村正を愛用していたと考えられます。伊勢桑名と三河は距離的に近く、実用を尊ぶ三河武士にとって、安価で切れ味鋭い村正は相性も良かったはずです」。徳川四天王の一人、本多忠勝の愛槍『蜻蛉切』は千子派の正真作。同じく重臣の酒井忠次の差料も正真だったといわれている。「そんななかで、偶然にアクシデントが相次ぎ、村正が忌避されたのかも知れません」と杉本さんは妖刀伝説についての見解を話す。

刀剣としての価値は、たとえば正宗に比べ、格段に低い村正。国宝や国指定重要文化財は一振りもない。ただ、妖刀のイメージがある意味幸いして、高い知名度に結びついた。

桑名市博物館の学芸員 杉本竜さん

村正だけでも二十振りをそろえた企画展が開催中

九月から開催されている特別企画展では村正二十振り、千子派十二振りのほか、桑名藩ゆかりの刀工の刀剣や、桑名市博物館所蔵の刀剣や装具が多数並ぶ。「地元桑名の神社への奉納刀を含め、村正がこれだけそろうのは大変珍しいです。いわゆる里帰り展でもあり、特別にご出品いただく熱田神宮御宝物の村正六振りも見られます」と杉本さん。

見どころの一つが、家康の遺品として尾張徳川家が所持していた村正と、江戸城開城の際に有栖川宮熾仁親王が帯刀した村正の、相対する二振りが会すること。また、村正ではないが、桑名藩の刀鍛冶、正繁の刃長百十四・三センチという太刀も見ものだ。実際に人を切った刀としては、新陰流の剣術を完成させたとされる柳生連也（厳包）の脇指が展示されており、一度に二人の胴をなぎ払ったと伝える。

「村正は徳川家を倒してやろうと刀を作っていたわけではありません。神社にも奉納され、大切に保存されてきました。このたびの企画展は、妖刀から一度離れて、伊勢桑名の刀を見直す良い機会にもなると思います」

刀剣の美が集結された企画展には、かつての刀工たちが込めた情熱があふれる。

◇村正・正重が奉納される桑名宗社◇

「春日さん」と親しまれている桑名宗社（桑名神社・中臣神社）に奉納された村正と正重（千子派）作の刀剣、各二振りが今年二月、三重県の有形文化財に指定された。村正の二振りには、それぞれに「春日大明神」（中臣神社の別称）、「三崎大明神」（桑名神社の別称）と刻まれている

「村正、正重は当社への崇敬と感謝の心から、自らの作品を奉納したのでしょう。その思いを大切にし、今後も守っていきたいと強く思っています」と桑名宗社の不破義人（ふわよしひと）さんは思いを口にする

Information

特別企画展「村正　―伊勢桑名の刀工―」

会期／～10月16日（日）まで
会場／桑名市博物館（桑名市京町37-1）1・2階企画展示室
開館時間／9時30分～17時（入館は16時30分まで）
※月曜日休館（祝日の場合は翌日休館）
入館料／一般（高校生以上）500円、小中学生以下 無料
問い合わせ／0594-21-3171
※会期中、展示解説や初心者向け刀剣講座などを開催。
詳細は桑名市ウェブサイト内、桑名市博物館
http://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,51230,235,414,html

◇桑名の刀剣女子が語る村正◇

刀を擬人化したオンラインゲーム「刀剣乱舞」の人気から、刀剣に興味を持つ若い女性（刀剣女子）が増えている。ゲームユーザーであるが、それ以前から刀剣に関心があったと話す二人に話を聞いた。吉田奈稚子さんは中学生の頃、剣道部に所属。型の練習で扱った木刀の形や重さにあこがれを持ったのがきっかけ。岡本ほのかさんは刀の目貫（めぬき）などの装飾に惹かれ、次第に刀自体の魅力にはまっていったという。「村正といえば妖刀！」と二人は口をそろえる。「徳川に祟るという伝説の力は大きく、まずはそこを入り口にしてもらえればと思います。作りは武骨な感じですが、切れ味が鋭いのが村正の魅力。今回の企画展を通して、多くの人に桑名の刀工、村正について知ってもらえるとうれしいですね」
※残念ながら現時点で「刀剣乱舞」に村正の刀は未登場

文／長屋整徳　写真提供／桑名市博物館　写真／編集室　デザイン／ABBEY ROAD